

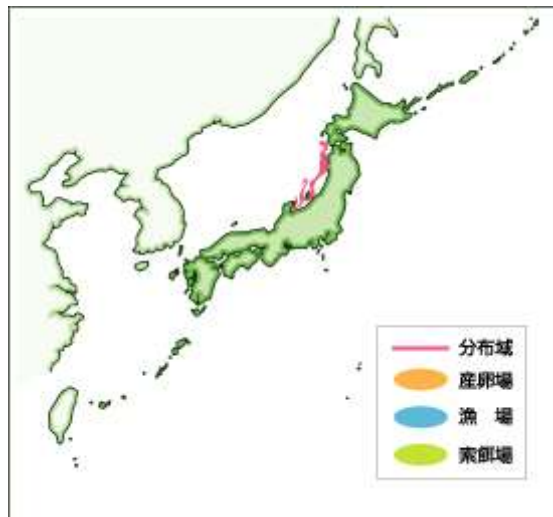
ハタハタ *Arctoscopus japonicus*

日本海北区 担当：日本海区水産研究所



生物学的特性

寿命：	5歳
成熟開始年齢：	1歳
産卵期・産卵場：	12月のごく短い一時期に沿岸藻場で産卵される 秋田県下での産卵が多い
索餌期・索餌場：	未成魚期以降の分布・回遊に関する知見は少ない
食性：	主食は端脚類、オキアミ類、魚類
捕食者：	大型魚類によって捕食されるが、実態は不明



漁業の特徴

当海域では、広く小型底びき網によって漁獲される。漁獲の中心は秋田県から新潟県北部にかけての海域である。秋田県では、産卵・接岸期を対象にした定置網・刺網による漁獲の割合も大きい。

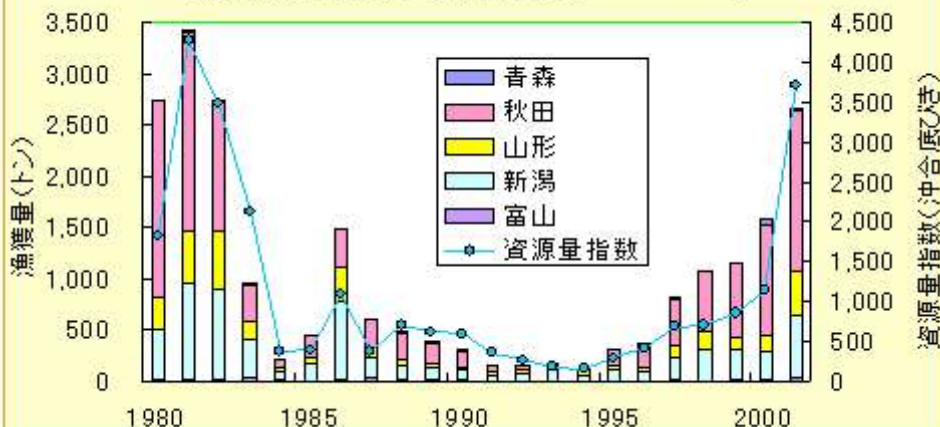
漁獲の動向

当海域におけるハタハタの漁獲は、1965～1975年には20,000トン前後（ピークの1966年には24,089トン）の高い水準にあったが、1976年以降急落し、1991年には158トン（最盛期の0.7%）にまで落ち込むという劇的な変化を示した。秋田県による3年間の採捕禁止（1992～1995年）等の措置を経て、近年、漁獲は増加傾向にある。2001年には、速報値で2,671トン、前年の168%増と大幅な伸びとなった。

ハタハタ日本海北區総漁獲量の推移



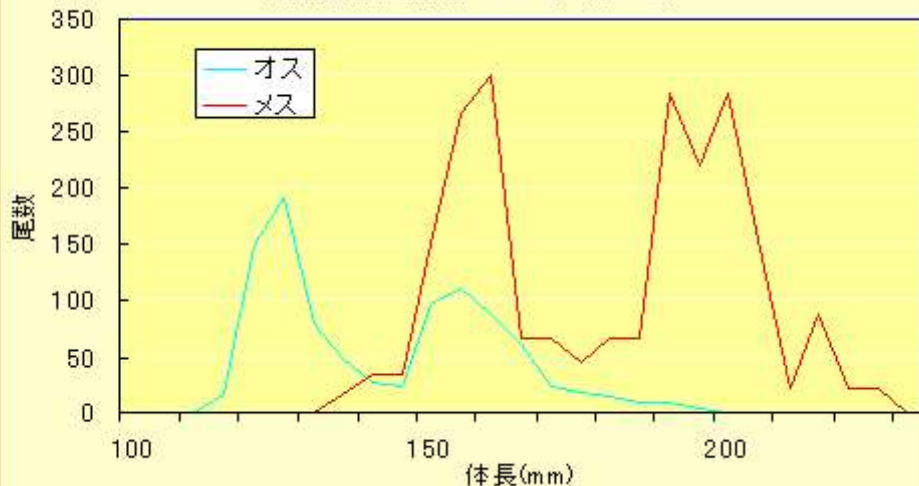
県別漁獲量と資源量指数の推移(1980-2001年)



資源評価法

漁獲量の推移とともに、沖合底びき網漁業漁獲成績報告書に基づく漁場別漁獲統計を解析し1980年以降22年間の資源量指数の推移を求めた。加えて、秋田・山形・新潟の3県における漁獲物の体長組成から、近年の加入状況、漁獲物の年齢構成を考察した。

体長組成(山形県・2001年9月25日)



資源状態

沖合底びき網（1そうびき）が本系群の漁獲に占める割合はおおむね2割程度であるが、同統計（「沖合底曳網統計」）による資源量指数の動向を見ると、資源の水準が1980年代前半に向けて急落し、1994年頃から上昇に転じた様子がうかがわれる。各県の調査によれば、近年、冬から春にかけて1歳魚が高い割合で現れている。また複数の年級群が漁獲されており、加入が順調であることがうかがえる。これらのことから、資源水準は引

き続き低位であるが、昨年に引き続き増加傾向にあると判断される。



管理方策

2001年には青森県を除き、前年を大きく上回る漁獲が記録された。2002年に入ってから漁獲量は前年を下回っているものの、若齢の年級群が順調に加入している様子が観察され、長期的には回復傾向が持続しているものと思われる。しかし、こうした資源の現状は、関係各機関の自主的な漁獲量の規制や産卵場の保護等の施策があった上での結果であり、現在の資源水準を維持するためには必要以上に漁獲圧を高めないことが肝要である。以上から、2001年の漁獲量を基準とし、ABCを算定した。

	管理基準	A B C (トン)	漁獲割合	F 値
A B C limit	0.8 Ccurrent	2,100	-	-
A B C target	0.8 ABC limit	1,700	-	-

資源評価のまとめ

- ・ 漁獲量と沖合底びき網（1そうびき）による資源量指数は、80年代前半までに急落、1995年以降漁業管理下のもとで徐々に増えつつある
- ・ 2001年は、漁獲が前年の168%増
- ・ 近年、冬から春にかけて、1歳魚が高い割合で現れている

管理方策のまとめ

- ・ 必要以上に漁獲圧を高めず、回復傾向にある資源を保護する
- ・ 1995年以降の漁獲量増加傾向に鑑み、管理目標は前年の漁獲量を目安とし、1歳魚の加入状況、漁獲物の年齢構成などから資源状態の観察を行っていく
- ・ 産卵場・産卵群の保護が資源回復のために必要